

蒼 (そうぼう) 氓

石川達三



そう
蒼

ほう
氓



定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草 15 E

昭和二十六年十二月二十八日 発行
昭和四十二年二月二十日 二十三刷改版
昭和四十七年一月十日 三十二刷

著 者 石川 達三

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替東京 八〇八番

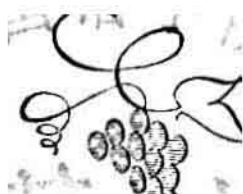
乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新潮文庫

蒼

氓

石川達三著



新潮社版

285

目次

第一部 蒼 氓……………七

第二部 南海航路……………九

第三部 声無き民……………二〇三

解説 山本健吉

蒼

氓

第一部

蒼そう

氓ぼう

一九三〇年三月八日。

神戸港は雨である。細々とけぶる春雨である。海は灰色に霞み、街も朝から夕暮れどきのよう
に暗い。

三ノ宮駅から山ノ手に向う赤土の坂道はどろどろのぬかるみである。この道を朝早くから幾台
となく自動車が駆け上って行く。それは殆んど絶え間もなく後から後からと続く行列である。こ
の道が丘につき当って行き詰ったところに黄色い無装飾の大きなビルディングが建っている。後
に赤松の丘を負い、右手は贅沢な尖塔をもったトア・ホテルに続き、左は黒く汚い細民街に連な
るこの丘のうえのはが「国立海外移民収容所」である。

濡れて光る自動車が次から次へと上って来ては停る。停るときしぎしに詰っていた車の中から
親子一同ぞろりと細雨の中に降り立つ。途惑いして、襟をかき合せて、あたりを見廻す。女房は
顔をかしげて亭主の表情を見る。子供はしゅんと鼻水をすすり上げる。やがて母は二人の子を促
し、手を引き、父は大きな行李や風呂敷包みを担ぎあげて、天幕張りの受付にのっそりと近づい
て、ヘッとおじぎをする。制服制帽の巡査のような所員は名簿を繰りながら訊ねる。

「誰だね？」

「大泉、進之助でござえまし」

「何処だ？」

「へッ？」

「どこだ。何県だ？」

「秋田でござえまし」

所員は名簿に到着の印をつけて、待合室で待っているようにと命ずる。父は又へッとお辞儀をして行李を担ぎなおす。

待合室というのは倉庫であつた。それがもう人と荷物とで一杯である。金網張りの窓は小さく、中は人の顔もはっきりしない程に暗く、寒く、湿っぽい。

「此処さ待ってれ」と父は言つて、行李を担いで人の中を分けて入って行くと、荷物を置く隙間を探した。大きな棚が三段になつて幾列にも並んでいる。女達はみなこの棚の上に坐っている。男達は荷物に腰かけて煙草を喫っている。妙にしんとした碌々ろくろく話声もしない。子供達が泣きもしない。憂鬱に黙りこくつて、用もないのに信玄袋を開けて見たり、手のひらを眺めて見たりしているのだ。

行李を置いて出て来ると大泉さんはほつとして戸口に立つた。ぬかるみの坂道を自動車はまだ続いている。はてしもない移民の行列だ。ブラジルへ、ブラジルへ！

遠く、港が灰色にかすんで見えている。その向うには海がぼやけている。そしてその海の向うには、外国がある。ついぞ考へて見たこともない外国という事が今は大きな不安になつて胸を打つ。すると又しても故郷の山河を思い出す。故郷には傾いた家と、麦の生え揃そろった上を雪が降り

埋めている幾段幾畝の畑と、そして永い苦闘の思い出とがある。しかし、家も売った畑も売った。家財残らず人手に渡して了った。父と祖父と曾祖父と、三つで死んだ子供と、四基の墓に思いつきりの供物を捧げてお別れをして来たではないか。

「本倉さん、まんだきや？」女房が後から問いかけた。ふりかえろうとした時に、恰度受付へやって来た一団の家族を見つけて、おう、イン馬來た！と言った。彼は漸く樂々とした微笑を浮べ、煙草を喫う事も忘れていたのに気がついて袂に手を入れながら、頑丈な大きな肩に細く光る雨を受けて受付の方へ歩いて行った。女房もや々と遣り場のない氣持を和らげられて、十三と五つとの子供達にまで「ほりゃ本倉のおんつあんが御座った！」と言った。

本倉さんとは杉の叢立ちを隔てて隣同士であった。彼は大阪の親戚へ寄ったので一足後れて来たのであった。彼は六人の家族を連れて、てんでに荷物をかついで、倉庫の入口に立つと愕いて言った。

「おんや居だも居だも！こりゃ一隻の船さみんな乗れツかな？心細くねくてえかべどもしや」「ンだ」と大泉さんも同感した。それから人々の間を掻き分けて何とか落ちつく場所を見つけると、知らない人達の肩のあいだに挟まって行李や包みの上に腰をかけた。人いきれがむっと臭くて、雨に濡れた着物の蒸れた匂いが鼻をついた。眼の前の棚の二段目には婆さんが坐っていて、鼻水をすすっては煙管をかちかちと叩いていた。憂鬱そうに唇を歪めて煙草を喫った。そしてぼんやりと傍に佇んでいる若者に向って、勝治仁丹持ってたか、と言った。門馬さんと婆さんは風邪をひいているのだ。勝治は隣りの若者に向って、

「孫さ、仁丹ねえか、有ったらけれ」と言った。孫市はまた隣りへ向いて、
「姉しゃん仁丹有ったな。出してけれ」と言った。紡績女工であった頬の赤いお夏は、バスケットの蓋をあけた。

洋服を着た洒落た娘がマンドリンを抱いて立っている。父親の勝田さんは革のスーツケースに腰かけて、襟に毛皮のついたインバネスを着ている。半ば白い髭ひげがあつて、でっぷりと肥えていて、物知りめいて隣りの中津井さんという熊本くまもとの男に話しかけている。

「そりゃあんた日本とは比べものにならん。氣候はね、いつでも合服一枚で済むようなええ氣候だし、土地と言えばもうその肥えて肥えて、桑がね、桑の苗がね、植えてまる一年で以て、こう！二寸からの直径になる。わしは一つ養蚕をうんとやるつもりですがね、珈琲コーヒーはもう生産過剰で行き詰りましたな。将来は果樹及び養蚕、殊に養蚕はええですよ。現在では絹物は全部輸入ですからな、ええ」

元気で喋舌しゃべっているのは此の人ばかりで、相手の中津井さんも俯向うつむき勝ちだし、彼の多弁が却つてそのあたりの人々を一種沈鬱な不安な氣持にさせるのであった。本倉さんは喫い尽した煙草を下駄で踏み消しながら囁ささやく様に言った。

「大丈夫だべな」

「うん」と大泉さんは答えた。それは体格検査の事であつた。本倉さんはトラホームであつた。そしてブラジル入国の移民の第一条件は（一、トラホーム患者ニ非ザルコト）である。患者はサントスの港から一步も上陸させないでそのまま送り返される。これは移民にとって最大の恐怖で

あった。しかし本倉さんは郷里の予備検査で合格したからこそ来たのである。

「何としても合格せんばならんねな」大泉さんは決心を固めるようにつぶやいて大きな体^{からだ}を行李の上でぎしぎしと置き直した。すると彼の後に居た麦原さんは、土の浸^しみ込んだように黒い皺^{しわ}の寄った顔をふり向けて立ち上った。

「お常、こっちや来え」

十五六になる赤い襟^{うしろえ}の生々しいお常はお下げにした赤い髪を背に垂らして、父の後から人混^ごみを分けて外に出た。外にはまだ銀色の細い雨が烟^{けむり}のように降りつづいていた。父は烏打帽を傾けて軒づたいに倉庫の裏に廻って行った。ここならば誰にも見つかることはない。ただ軒滴^{しずく}が光りながら並んで落ちて来るだけだ。お常は父が何をするのかを知っていた。だから父の前に立ち止ると眼を閉じ、じっと顔を上に向けて待った。少し蒼白^{あお}い弱々しい顔にしぶきの様に小さな雨の粒が冷たく落ちた。父は袂からロート眼薬の小瓶^{びん}を出して、輝^{ひかり}の切れた大きな手で不器用な点眼をしてやった。(何としても合格せんばなんね！)

ぬかるみの坂道を自動車はまだ続いていた。三ノ宮駅に汽車が着くたび毎に、親子手を引きあい、荷物をかつぎ、ぞろぞろ下りて来るのだ。殆んど大部分の者が始めての自動車と言うもののためらいながら乗るのだ。その車の行列を横切って、灰色に暗い雨空にりんりんとけたたましい鈴の音を響かせて、号外売りが叫びながら走っていた。ロンドン軍縮会議^{ちようど}が恰度真最中である。

朝の新聞では軽巡洋艦の艦型制限で議論沸騰し再び委員付託となった事、アメリカは依然として大巡十八隻案を固持していると言う事、しかもこの問題をよそにしてイギリスはシンガポール要^{よう}

塞の工事中止声明を裏切って工事費の増額予算を議決した事を知らしている。一方では現職文部大臣小橋一太が越鉄疑獄に連座して、辞表を出した匆々に起訴拘留された事を報じている。物情騒然として暗澹たる中に、胸を刺すような鋭い号外の鈴の音が絶えず移民の自動車の行列を突っ切って走っているのだ。

午後十時、黄色いビルディングの中から騒がしい銅鑼が鳴り響いて来る。すると所員が受付の天幕の中から名簿を持って出て来る。倉庫の入口に立って身動きもならぬほど詰っているお百姓達に向って叫ぶ。

「只今から体格検査がありますから、名を呼ばれた人は家族全部を連れてあちらの建物に行ってください。順番にです。荷物はそこに置いたままで宜しい。いいですか、もう一遍言いますよ。名を呼ばれた人は……」

倉庫の中は急にざわざわとして荷物をまとめて立ち上る用意を始める。所員は北海道から順番に青森、秋田、岩手と呼び上げて行った。呼ばれて倉庫を出た者は女房を促し子供の手を引きながら、細い雨が斜に降る中を黄色い建物までぞろぞろと歩いて行く。入口を入ると暗い長い廊下が真直ぐに伸びていて、その廊下に列を造って待たされる。先頭から順次に名を呼ばれて医務室に入って行く。そこで上半身を裸にさせられて、背と胸とを銀色の小槌で叩かれて、次に瞼の皮を裏返しにめくられて、その二つに合格すると室と寢床との番号札を渡される。それを持って次の室へ行く。そこで当収容所に於ける生活の注意を与えられ、首からぶら下げる様に紐のついたセルロイドのサックに入れた食堂「パス」を貰う。このパスがなくては飯が食えないのだ。

廊下に並んだ人達の間では、雨に濡れた着物から発する悪臭と濡れた女の髪から発する悪臭とがむっと温かくて、暗い片隅に踞^{うすく}まった大泉さんは、（何としても合格せんばなんねー）と本倉さんに言うともなしに言った。すると麦原さんは今一度お常を促して洗面所に行った。そして人の居ない隙をみて又眼薬をしてやった。

「佐藤勝治……妻夏」と係員が大きな声で呼び上げた。お夏は、弟や知らぬ人達の前で妻と呼ばれるのは始めてであった。彼女は伏眼になって勝治の後から医務室に入って帯を解いた。その姉の頬が林檎^{りんご}の様に赤いのを弟は美しいと思った。

「佐藤勝治の母門馬くら。弟門馬義三。……妻の弟佐藤孫市」

孫市は名を呼んでいる所員の前を通る時叱られはせぬかとびくびくしていた。姉のお夏と勝治とは本当の夫婦ではないのだ。友人の門馬勝治を婿にして形式だけ佐藤の籍に入れたのだ。そうして（満五十歳以下ノ夫婦及び其ノ家族ニシテ満十二歳以上ノ者）を以て家族を構成しなければ渡航費補助移民の条件に合わないからだ。門馬さんは婆さんと二人の息子、孫市は姉弟。この二組が一緒になって一家族という形式を臨時に作ったのだ。然し是は孫さんの智慧^{ちえ}ではない。移民取扱海外興業会社の地方業務代理人山田さんが教えてくれた術だ。——叱られるところではなかった。係りのお役人にとっては平凡過ぎる事である。むしろ奨励してもいい位だ。そうすれば海外発展の成績は上り国内の人口問題も多少は助かる。海外興業会社にして見れば移民が一人でも多ければそれだけ社業殷盛^{いんせい}だし、地方代理人山田さんにしても自分の扱った移民については歩合が貰える訳だ。孫市よりもうまいのは物知りの勝田さんだった。彼は移民会社^{いんせいかい}に託して五千円を

ブラジルに送つてある。そして現に懷中に三千円を持っている。これだけ財産が有つては渡航費補助は貰えない。自費で行くとすれば家族八人二百円ずつで千六百円かかる。そこで考え出したのが自分の十六になる娘を親戚の青年の嫁に仕立てる事だ。相手の青年は検査前の青二才だからこの男を戸主にしてええ、戸主は無一文だから当然移民になれる。すると勝田さんは妻の父である。勝田一族は妻の母、妻の兄弟という名目で、かくて立派に船賃千六百円をまる儲けした。拓務省をペテンにかけた訳だ。

麦原さんはお常のことが氣になった。しかし眼薬の効き目で（当收容所に於て療養すべし）と言うだけでひと先ずパスした。そして本倉さんは「隣りの室で待つて居れ」と言つて後廻しにされた。

後廻しにされた中に熊本から来た黒川一家があつた。夫婦の間に十一を頭に九人の子がある。しかもそれだけでは移民家族にならないので親戚の十三になる女の子を入籍して連れて来た。都合十二人だ。最後の子供は生後三カ月である。規則には六月未滿の嬰兒は許されないのだ。医者はこの子を見た時にはッとした。思わず、これは！と言つた。

「君、ちよつと、見たまえ！」と彼は隣りに居る医者と言つた。

「恐ろしい栄養不良だよ」

この子は蚕の様にぶよぶよで蒼白く透きとおるような肌の下から静脈の網目がすっかり見えていた。凋びて皺の寄つた小さな顔、眠るでもなく醒めるでもなく唯ぐったりとしている表情。眼を開く力もなく声を立てて泣くことさえも出来ないのだ。